

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.97 2023年9月3日発行  
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369  
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

## 第40回記念演劇まつりが開催されました

2023年7月29日(土)と30日(日)に、第40回記念かわさき演劇まつり「モモ」(ミヒヤエル・エンデ作/大西弘記脚本・演出)が開催されました。4ステージで、2000名を超える方が鑑賞されました。出演された方、観劇された方などに感想を寄せていただきました。

### モモとわたし

中田 結

今、川崎演劇まつり「モモ」を終えて私の心の中に残っているのは、モモと出会えてよかった、の一言です。このモモという作品に出会って、モモと出会って、家族、友達、時間の大切さを実感しました。今までは、私の置かれている環境や周りの人の優しさにただ感謝していただけでしたが、たくさんの役と関わることで、モモを演じることで、日常に溢れている人の温かさをモモを通して実感しました。4月から7月までの稽古期間、そして2日間の公演は、一つひとつ、私に日常の豊かさを感じさせる日々でした。それは私に大きな影響を与えました。4月、台本を読んだ時、本の中のモモを舞台にしたらこんな風になるのか!と、舞台上の円形劇場を思い浮かべて、わくわくしました。台本の中のモモは、とても自然で不思議で、心の豊かさや強さを持った女の子でした。

私がモモ役をもらったとき、私が考えるモモ像と私がかげ離れすぎていて、どうやって近づけばいいのだろうか、と、私のモモ像が全くつかめず、日常のモモ要素を探してみるというところから始めてみました。そうすると、日常にモモ要素がたくさんあることに気がつきました。いつも喋り続ける私の話をよく聞いてくれる友達。相手の話を最後まで聞く力について。試験前の時間がない!ってどういうことだろう。などなど。ジジやベッポのような存在が、私の周りにたくさんいることも私の日常とモモを重ねて、見えてきました。

また、キャストのみなさんが毎回の稽古の中で見つける発見に、刺激をもらっていました。60名を超える大所帯。役で関わったり、他の人の稽古を見ている

中で、私はこう思った、こんなことを感じた、というキャストの皆さんの言葉が、私のモモを作っていく中で、役への理解を助ける良い材料となりました。芝居が好きで、楽しんでいる人がいる空間で一緒に作っていくことはとても楽しかったです。演出家の大西さんが言う、「その時を、刹那を大切に」という稽古場で、学びと楽しさがある時間でした。役が決まって2、3週間経った時、大西さんが「まだモモと出会っていない。知り合いくらいかな。モモと出会えたら良いね」という言葉が、読みの稽古で出ました。本来なら、悔しい!と感じる瞬間なのかもしれませんが、私は知り合いにすんなりしていないと思っていたので、モモに少しだけ近づけた!と素直に嬉しいと思ったことを覚えています。本番までの稽古期間中、色んな不安や心配はありつつも、成長できたことがたくさんありました。そして迎えた本番。想像以上に大きな円形劇場と大きな時計、貯蔵庫の扉にびっくりしました。私が思い浮かべていた円形劇場が舞台上に存在していて、モモの世界で私が生きられることに喜びを感じました。モモと私で、最初は何の繋がりも見つけられなかったのが、終演後、観に来てくれた友達からはとても嬉しい言葉ももらいました。今回のモモで、自分の成長を感じることが出来ました。この経験を元に、これからも進んでいきたいと思っています。

写真撮影©長坂クニヒロ (以下同)



## 生きている実感

森 公洋

「ここで、4か月間稽古するのか！」期待と不安が入り混じった令和5年4月1日(土)、スペース京浜の稽古場に立っていた。この度、TOKYOハンバーグ大西弘記さん脚本・演出による第40回記念かわさき演劇まつり「モモ」に出演させていただいた私にとって、京浜協同劇団の稽古場は、生涯忘れることのできないドラマチックな場所となった。鹿島田駅から歩いて20分、普通の住宅地の中、舞台美術や小道具だらけの部屋、そこがこんなにも愛おしく感じるようになるとは……。

今回の舞台は稽古中に3つの「苦」が伴った。1つ目の苦は、向河原のオーディション会場が稽古場と勘違いしていた私にとって自宅の新百合ヶ丘から古市場の稽古場まではなんと片道80分間の遠さ。毎回、遅刻せぬよう必死であった。2つ目は、初日の4月1日からぎっくり腰！読み合わせが長いスパンであったので座って稽古から始まったので助かったが、大きな動きができずもどかしい思いをした。3つ目は、稽古中なんと自身初となる左ふくらはぎ肉離れで稽古1か月離脱。これは肉体的にも精神的にも痛かった。ぎっくり腰が良くなってきた矢先のことで、本当に辞退を考えたが、仲間が送ってくれる稽古動画を見ながら、自宅で自分の役作りに励み望みを繋いだ。

こんな苦しみに耐えながら、どうして稽古を続けられたのだろうか。それは何にも代え難い「生きている実感」であろうと思う。舞台に立つたった4回の経験、それに向かう40数回の稽古、仲間と語り合う演劇論や上達へのもがきの日々、稽古の後の生ビール、セリフを忘れては覚える日々、演出家の納得する語りと笑い、掛け合いの相手とぴったり合った喜び、衣装プランの美しさ、稽古場に徐々に出来上がる壮大な円形劇場、練習を完全に発揮できない焦り、空き時間に自主



稽古に付き合ってくれたありがたい仲間、「森さんが出るなら」と快くチケットを買ってくれた同僚や友人、夜中まで注意事項をメールしてくれる演出助手、最後まで全員が通すことのできないモブ、通し稽古の隙間を縫って食べるコンビニおにぎりの味、残りを数えると胸が詰まる稽古の回数、全ての経験が劇を創り上げることで得られる「生きている実感」だ。それを感じるために私たちは、演劇をするんだと思う。いつも大西さんが言っていた「苦しさの先に大きな喜びがある」今なら、体の芯から理解できる。本気で生きた4か月だからこそ、観客に伝わる舞台になるんだろうし、自信をもって届けられる自分になれるんだろう。

さて、こんな濃い時間を経験してしまった我々はこれからどう生きるんだろうか。普通に生きられないじゃないか、と思う。しかし、大丈夫。演劇は日常に転がっている。人と話す時に学んだ発声が活き、新たに人と関わる時にあの仲間のようになりたいと願い行動する。さあ、あの「生きている実感」をもう一度得るために、この日常を刹那に生きよう。ありがとう演劇！



第40回かわさき演劇まつり「モモ」に参加して

## 限りあるいのち、時間を大切に

柴田 悦子

かわさき演劇まつり「モモ」は、多くの方々の協力があって無事終わりました。

公演が終了してからの1週間、私は正直何をしたらよいのかわからない状態でした。それは喪失感かとその時は思ったが、いや達成感だと思います。4月から4か月間におよぶ稽古。出演者は7歳から90歳と幅広い年齢層で、それぞれ学校や仕事、生活があり、稽古場で全員が揃うことがなかなか難しかった。それでも、限られた稽古期間の中で、誰もが夢中で稽古に臨んだと思う。特に子どもたち、学生の集中力には圧倒されました。

今回私の役どころは、街の人々から時間を盗もうとする灰色の男。演出から様々な要望もあり、大混乱し

ながらも15名の灰色の男たち、素晴らしいチームワークで本番までやってきました。切磋琢磨しながらの稽古は本当にかげがえのない時間でした。そういった人とのつながりが、演劇の魅力だと私は思います。その灰色の男たちが舞台上に勢揃いすると迫力があつたそうです。うれしいですね。

「モモ」という作品を通して、「時間」について考える機会になりました。時間は誰にも平等に与えられるものだが、使い次第で充実しゆとりが持てたり、または奪われたりもする。今の生活はデジタル化され、例えば家事が時短でこなせるようになり、時間が余るはずだが、私自身「忙しい」が口癖の生活である。どんなに便利になっても、今という時間を大切にしないと時間泥棒である灰色の男たちが生み出されてしまう。改めて今という時間を見つめなおしたいと思いました。

私自身、第33回（平成19年）のかわさき演劇ま



つりが初参加、しかもそれまで演劇経験ゼロでした。たまたま、その前年の演劇講座を知り参加したことがきっかけで、京浜協同劇団に通うようになりました。私にとっては京浜協同劇団は、今では落ち着ける場所、パワースポットかもしれません。

コロナ禍で活動自粛もありましたが、演劇まつりや川崎郷土市民劇、京浜協同劇団や他劇団への客演と、地道に現在も継続中です。仕事と家庭と、普段の生活も慌ただしく正直忙しい。演劇がよくできるものだと、自分で自分を褒めてしまうこともある。そうやって自分を鼓舞しているのだが、なぜそこまでして演劇を続けるのか。はっきりしたことは自分でもわからないのですが、人とのつながりが好きだから、演劇を通して自分自身のこと、家族のこと、これからの社会全体のことを考える機会となり自分自身も変わるからと思う。また観に来た方から、「元気ももらった」等の応援が、私を奮い立たせているのも確かです。そして何より演劇は難しく、完璧、できたという達成感までたどり着かない。だからこんな私でも、やめられないのかもしれない。

モモのセリフで「時間はいのち」とある。限りあるいのち、時間を大切にして、これからも演劇を愉しみながら続けていきたい。



## 「モモ」その後

優木 かおる

7月29日（土）30日（日）各日11時と15時30分の4公演。会場の多摩市民館大ホールの入り口に、私は受付スタッフとして立っていました。そんな私の後ろで会計担当をされていた「文化の仲間」の方から原稿依頼が……。隣にいた京浜協同劇団の藤井さんにプッシュされたら断れないじゃないですか（笑）

という経緯でこの原稿を書いております。

5年前の「注文の多いどんぐりと山猫と料理店～宮沢賢治の不思議な童話宇宙～」(今振り返ると長いタイトル!)の時は出演者として、コロナ禍を挟んで一昨年の「冒険者たち ガンバと15ひきの仲間」の時は場内案内のスタッフとして参加させて頂きました。今年も高齢両親の遠距離介護等私的諸事情があつて出演は叶いませんでしたが、実行委員会の劇団である京浜協同劇団さんとなんとか続けて関わらせてもらいたいという思いがあるのです。何より「わあ、お久しぶり!」とお客様や出演者と出会える楽しみがありますから。

さて、色々な所で何度も上演されている不朽の名作「モモ」であり、世の中も動き易くなったお陰か、参加者が62名という大所帯になり、トケイ組とハマキ組のダブルキャストでの上演でした。ダブルキャストと言っても全員が全公演何らかの役で板に上がり、4





回公演を完全燃焼しました。

当然！ 私は両方の組を拝見しましたよ。

いつも思うのは大道具小道具の素晴らしさです。あの大時計や重厚な扉は勿論ですが、場面ごとに工夫された様子が見て取れて、それらが舞台をぐっと引き締めています。役者はとてもやり易いだろうなあ、と感心してしまいます。

そして音楽、音がとても効果的に使われていて、繰り返される音も見る側の期待を裏切らず、想像を駆り立てるのに充分でありました。

明かりに関してはこれは私の感覚ですが、最後の希望の場面を引き立たせる為としても、全体に舞台が暗いなあ、という印象を受けました。

まあ何度も出てくる時間泥棒達が不気味だからなおさらなのかもしれませんが。

思うにそもそもグリム童話とか日本昔話とか子ども向けのようで実はとても恐くてグロイ、それは人間の本性を描いているものだから、そういうものかもしれません。

そしてモモ。モモが小学校低学年の体が小さい子なのか、もう少し年上で色んな経験値が高いであろう体の大きな子なのか、これは芝居の作り方や観劇した側のイメージを大きく左右する要素だったのではないかと思います。

周りの大人たちの芝居もそれぞれのモモに対して違ってくるのは当然だし、役者たちは「見とり稽古」という貴重な経験が出来、それはまたダブルキャスト



の醍醐味、面白さであったろうと思います。私は両組を見たので比べてしまいますが、大抵のお客様は1回だけですから、それぞれの舞台から素晴らしいメッセージを受け取ったことでしょう。

通しの役だった子どもたちは、年齢に幅があったことで子どもの世界がより象徴されたし個性も際立っていました。が、これも私の感覚になりますが、子どもたちがモモに背中を押されて大人たちに要求をする所、プラカードを持つのには小さな抵抗感があって胸が痛くなりました。

時間泥棒と大人も子どもも全員で踊るシーンはよく揃っていて、いっぱい稽古したんだろうなあ、とこちらは胸が熱くなりました。

最後、全員が起き上がり歌い上げ拍手が起きた、そのすぐ後に、なんとも不気味な時間泥棒のBGMが流れ、ドキッとしたのは私だけではないでしょう。時代を超えて私たちに訴えるテーマは、これからも続くのでしょうか。

最後に、物足りなさを感じて、ここに和田庸子さんがいないことを思い知らされたのでした。



## いつも素敵な人々で溢れていた

大西 弘記

かわさき演劇まつり『モモ』が終わって数日が過ぎた。4月1日の顔合わせから長かった稽古期間も今となっては随分と前のように感じる。市民劇だから本番が2日で終わってしまうという儚さ<sup>はかな</sup>。その儚さのために出演者、スタッフ、実行委員会、みんな心をついに本番を迎えられたと思う。

出演者60名を超える大所帯。僕たちは演劇でしか出来ないことをやれたと蓋し言える。そして市民劇の枠を越えた創出<sup>けだ</sup>、然しながら市民劇でしか出来ないことを、ことに『モモ』と一緒に創った仲間たちとしか出来ない演劇をやれたと蓋し言える。色んなことがあったけれど、みんな本当に表現することの難しさと

対峙して、互いを支え合い、乗り越えた喜びを実感して、その先にある素晴らしさと出逢い、沢山の新しい景色を共有した。なんとか動員も2000名を超えたようで本当に良かった。なんだか客席がコロナ前に戻ったような気がして嬉しかった。

僕は毎日の疲労が心地良かった、とても大変だったけど。

ご存の通り『モモ』は世界的に有名な児童文学である。それを上演台本にするという作業は、ある意味、背骨が折れてしまいそうなくらいの重圧があった。ミヒャエル・エンデが伝えたかったことを僕なりに書け



ること、書きたいこと、書かなければいけないこと、という気持ちに突き動かされて原作には無いシーンを書いて上演した。それは、つまり僕が勝負に出たシーンでもあり、そこに勝ち負けはなく、ただただ信念のみだった。

時には何も獲得出来なかったとってしまう現場も、これまでにあった。いや、自分が未熟ゆえに、そうしてしまうだけだったのかもしれない。然し、今回の『モモ』の現場では、僕がこれまでに取りこぼしてしまった獲得を取り返せたんじゃないかと思っている。特に信念という精神的なものを自分の中で強く実感出来た。

僕は承認欲求で創作をやっているわけではなく、自



分に何が出来るんだろう？というある意味、己への迫及探求が楽しかった。その分、一定の質から零れ落ちると批判や否定の声も浴びるような仕事だけれど、辛辣な言葉だとしてもアドバイスだと思うようにやってきた。苦しいとか怖いとかは、いつもすぐ隣にいる。それを強く感じるとき、僕は自分を信じられた。

そういえば、出演者63名の中には演劇経験のない人たちもいた。年齢も7歳から90歳と市民劇ならではの。その中で何度も考えた。プロとアマチュアの違いは何だろうか。技術的に優れた俳優や、そうではなくとも生業としている俳優をプロと呼ぶのかもしれないが、表現することの根幹は観客に自分たちの思いがどう伝えられるかであり、プロでもアマでも関係ない。今回のかわさき演劇まつりは一つの舞台の成功のために老若男女が集い、そして演技者として舞台の上で生きていた。

演劇がこんな風に市民の隣に存在して、市民に愛されることによって、演劇の大きな力を感じる。その力は人を育て、街を創り、生きることを豊かにしてくれる。演劇に学び、演劇に育てられている自分だけれど、その演劇の中には、いつもいつも素敵で溢れていた、そして今回も。

文化芸術は人間が人間らしくあるための最後の砦。デジタル化が加速される社会、時代の中で自分を見失わず、これからも演劇を通して社会や生きる人たちと向き合っただけでいい。



会員紹介 第4回——小野寺晃さん

# 現在も日本自由書道連盟の草書の手本を担当

文化の仲間事務局長 山本 健介

会員の小野寺晃さんをご紹介します。

小野寺さんは、元横浜市役所に勤務していて、労働組合運動や平和運動をしていました。また、日本自由書道連盟の役員をしている書家の小野寺研心さんです。

今年92歳になりましたが、現在も日本自由書道連盟の草書の手本を担当しておられます。

\* \* \* \*

## 小野寺さんによる自己紹介

昭和6年6月(1931年)神奈川県浅間町(現、西区)生まれ、8人兄弟弟の7番目に生まれる。

### 幼年時代

満州事変・日本労働組合総評議会結成・前進座結成などの年に生まれ、昭和13年(1938年)小学校入学。この年から日本国中が戦争に没入するよう駆り立てられ、経済統制開始、言論統制取り締まりが激しくなる。ラジオは戦勝の放送で国民を駆り立てていた時代。

昭和14年青少年学徒に勅語、(物価統制令・兵役法施行令改正、第三乙種設定・パーマネント・夜間ネオン・中元・歳暮廃止・デパート年末大売り出し廃止)統制が厳しくなり質素な生活への自粛から強制になる。

修学旅行制限通達・日独伊三国同盟調印(1940年)・紀元2600年大政翼賛会成立(昭和15年)、軍国機運高まる・排外国粹主義を強調(贅沢は敵だ!)

昭和16年小学校を国民学校と改称、ドレミをハニホヘトに変える、ローマ字廃止、軍事教練などの教育が強くなる。東条内閣の成立・真珠湾攻撃、対米英宣戦布告、防空頭巾で非常事態体制に入る。

兵役法施行令改正(丙種合格も召集)。

昭和17年皇軍は各地に転戦、連戦連勝と東条首相は強調したが、ガダ

ルカナル戦敗色なる。

昭和18年山本五十六連合艦隊司令長官ソロモン上空で戦死、大学野球連盟解散・アッツ島守備隊玉碎(2638人)・上野動物園で猛獣を薬殺など。

### 勤労働員時代と少年期

高等小学校時代(12歳)1学期の午前中勤労働員、午後の2時間は学業を受け、2学期からは学業がなくなり工場に直接に勤務させられた。最初に配属させられた工場は横浜木工製造所でボート制作補助員と言われていた。戦後陸軍特攻艇(震洋)を制作している会社であったことを(「太平洋戦争史慟哭編」より)知りました。

他に数社の工場、5月29日の横浜大空爆で自宅焼失、一時期栃木県に疎開、終戦を迎え横浜に戻るも学校は焼失していて、途方にくれていましたが、卒業証書は区役所で頂き就職は出来ました。職を変え、16歳で横浜市交通局に就職、車掌兼運転手を40年、市の合理化で市庁部局に配属、道路局路政課勤務、1年後組合班長に推薦され労働組合活動を退職まで(建設支部執行委員)。

### 文化の仲間

京浜協同劇団文化の仲間に入会したのは何年になるか忘れました。役員になったのは、山木さんから乞われ受託してきました。娘の仕事の都合で2020年9月宮古島に移住しましたが、翌年2月にコロナ陽性なり入院1週間、自宅療養外出自粛のお触れが出て散歩もしておりませんでした。その間、城谷さんから激励の言葉を頂きましたが、持病の腰椎狭窄症で歩行困難になり、2022年2月横浜に帰宅しました。現在リハビリ療養をしていますので川崎まで行かれない状態です。宮古島は、ミサイル迎撃砲・弾薬庫を作り、基地の島となりました。残念なのは、戦争遺跡めぐりができなかったこと。



特攻艇震洋の写真  
海軍は「震洋」、  
撃艇マルレ  
宮古毎日新聞  
陸軍は「四式肉薄攻

連載 菅野章のわがうたごえ人生—第3回

## バレーボールからうたごえに

菅野 章

9 畳に 9 人が住んだ社宅生活は 15 年余続きました。男は私 1 人で 1 年上の長女は中学を卒業すると徒歩で 20 分余で通学できる公立の翠嵐高校に合格しました。

年子<sup>としこ</sup>だった私も進学コースを選んでいたし、父は神中（神奈川 1 中）に合格したものの入学直前に父親が亡くなったため進学を諦めた経験からも、一人息子の私を進学させたかったようでした。

しかし私は、9 人家族の家計の大変さを見て就職を選んで、父の働いている会社である三菱重工横浜造船所に養成工として入社したのです。

現場作業の中堅幹部を養成するこの制度は、中卒後 3 年間のうち 1 年間は高校と同様の授業を勉強し、2～3 年は配属された職場と学校で半分は仕事の勉強で、1 年目は月 4 千円の手当（給料）が支給されました。

初めての給料を袋ごと母に渡して喜ばれたことは忘れられないものとなりました。

その当時は生徒の約半数が中卒後就職する状況でした。

入社 1 年後、私は中学 2 年のときから始めたバレーボールがやりたかったので社内のバレーボール部に入部しました。

当時は 9 人制でしたから背の低い人でも選手になれたのでした。当時の三菱横浜のチームは横浜市内の企業チームでは強く、県内では断トツの日本鋼管を除けば上位を占めるチームでした。

その後 6 人制が導入され、全日本の監督にもなった松平や出町、鈴木といった選手とも闘いました。

勝ったことは 1 度もありませんでしたが、交流試合もしました。彼らは仕事の半分以上の時間を練習するというプロ選手（プロ野球の王・長嶋級）でしたから、昼休みと定時後週 3 回程度の練習の「たたき上げチーム」とは大きな差がありました。

3 年目からレギュラーの後衛を守り、サーブが得意な選手になりましたが、20 歳過ぎになると、現場作業に追われ、世の中の矛盾に気が付き始め、労働組合青年部の活動や横浜地区労主催の「労働学校」を受講すると同時に、「横浜うたう会」に入部。定時間（当時は午後 4 時）後の時間の過ごし方は、バレーボールから組合活動やうたごえ活動へと移っていきました。

横浜うたう会ではロシア民謡等を中心にした男性ばかりの合唱団でしたが、戦後の文化運動の走りとして青年たちの心をとらえた「うたごえ運動」を特集した雑誌『知性』にも取り上げられたサークルのひとつでした。入部して間もなく先輩から「神奈川合唱団の研究生に入って勉強してきたら」と言われ、1960 年 1 月に神奈川合唱団 18 期研究生となったのです。

時代は歴史的な 60 年安保闘争の最中でした。

週 1 回のレッスンのため、南武線の向河原まで 50 分ほどかけて通ったのですが、50 人前後だった研究生の参加が、時には半数になったのは、国会デモ参加

のためでした。

そんなとき、このままレッスンを受けるか、国会に行くかが議論になり、「俺は 1 曲でも新しい曲を覚えて職場のサークルでうたい広めたい」「デモにも行きたいが、今日はレッスンを受けたい」等の議論を交わし、フォスターの「おおスザンナ」や「我等の仲間」など、6 カ月後に団員になり舞台上でよく唄った曲を覚えられました。

この研究生の経験は、東京電力や日本鋼管、東芝、森永等の大企業で働く仲間、病院で働く看護婦（当時）さん、中小企業で働く仲間等、造船所で働く私には知らなかった世界の人々との貴重な交流の場となりました。

この「60 年安保闘争」後の春闘では神奈川合唱団の一員となり、ストライキになると「がんばろう」（荒木栄作曲）を歌唱指導する機会が多くなりました。

こんなこともありました。

春闘の会社回答が不満の際、組合は営業部門の職場のストライキの指令を出しました。その際、「闘争を盛り上げるためうた（「がんばろう」）の指導をしてこい」と、私を「指名スト（1 時間）」にしたのです。現場で働いていた私は急いで営業職場に行き、「がんばろう」の歌唱指導をしてきました。そんな「指名スト」という制度もあったのですが、以来私は「がんばろうのお兄さん」などと呼ばれたりしたのです。

その後日談ですが、その年の春闘も終わり、営業職場の旅行が熱海のホテルで行われ、部長が「一人ずつ唄え」と命令したところ、順番が回ってきた若い女性社員が「がんばろう」を部長の前で唄ったという話を聞きました。

横浜うたう会は 20 名程度のメンバーで唄っていましたが、会社の「アカ攻撃」が厳しくなり、広い工場（現在の「みなとみらい地区」）から昼休みに集まるのも困難な中、昼休みコンサートを決行しました。

「お食事のみなさん！ 私たち横浜うたう会のうたを聞いてください！」と、「がんばろう」や全造船の組唱歌である「造船労働者のうた」そして当時流行していた村田英雄の「王将」の替え歌で「吹けば飛ぶような月給袋〜」と唄って結構受けたこともありました。

春闘や、安保反対の政治ストにも参加してきた産業別組合全造船機械の中核分会であった三菱重工内の組合は、1964 年の三菱三重工の合併による大合理化進行によって、組合への介入攻撃が始まったのでした。

この三菱三重工の合併の年に、私は神奈川合唱団の活動の中で知り合った仲間である妻と「合併」したのでした。



私説・京浜協同劇団の歩み 第1回

# 3劇団が合同で『漁港』上演

城谷 護

「おう、君か」

そう言って対応してくれたのは、後で分かったことだが水野哲夫だった。

私はできたばかりの川崎協同劇団（現在の京浜協同劇団）の第1期生に応募するため劇団を訪ねた1959年11月のことだった。場所は国鉄鶴見線の浜川崎駅から徒歩3分の日本鋼管川鉄労働組合の会館。のちに映画のロケによく使われる場になった古い建物で、木の階段なんか黒光りする重厚なものだった。

そこが劇団の稽古場になっていた。その人に応募の動機などいろいろ聞かれた。私は朝日新聞の「劇団第1期生募集」の小さな記事を読んで応募したと答えた。1ヶ月後の翌年1月からレッスンは始まるとのことで、私は胸を弾ませながら稽古場を後にした。

## 第五福竜丸を描いた『漁港』を合同公演

ところが、その頃、3つの劇団が合同して『漁港』公演をやることになっていて、早くから応募していた私は研究生のレッスン開始より前にその公演の手伝いをやることになった。『漁港』は、ビキニ水爆実験の犠牲となった第五福竜丸のことを描いた原源一の作品だった。

その公演は1959年12月7・8・9日に川崎労働会館で行われたが、その千種<sup>せんしゅうらく</sup>楽のカーテンコールで、黒沢参吉代表は「3つの劇団が合同して新しい劇団を

作ります」と高らかに宣言したのだった。

3つの劇団とは、地域劇団の劇団建設座（18人）、職場サークルの川鉄演劇研究会（9人）、そして成人学校OBの劇団もぐら（3人）だった。建設座では黒沢参吉、中沢研郎、原科清、郡山勝利、田中和代、室野定子、和田能久（和田庸子の父）らがいた。川鉄では細田寿郎、水野哲夫、若菜とき子、土井まち子ら、もぐらでは前田耕一、野口行男、横田治らがいた。その人たちのことはよく覚えている。中でも和田能久はなぜか私を可愛がってくれた。

こうして川崎協同劇団は1959年12月、創立したのだった。その時の川崎市の人口は約80万人。今の154万人の約半分だった。

## 卒業公演で『赤い鉄の生命（いのち）』

第1期研究生の応募者は約20名で、田中和代（かずよ）の指導担当でスタートした。無対象行動とか、エチュードとか、ダンスとか、初めて体験することばかりで楽しかった。レッスンは毎週夜3回だったが、月に2回くらい、歌の指導に神奈川合唱団の石渡健司団長が来てくださった。「リムジン川」、「いぬめぐり」、「アリラン」、「もずが枯れ木で」など沢山の歌を教えてもらった。

私は、長崎工業高校を出て日本鋼管に就職、横浜の鶴見造船所で設計技師として働き始めたが、仕事の行き帰りだけでは何とも味気なく、何かやりたかった。絵が好きだったので美術を始めようかとも思ったが、絵は1人だけの世界。やはり、仲間と群れることがやりたいと思って演劇を選んだのだった。

研究生期間の体験は、すべてが新鮮で驚きの連続で、まるで違う世界に飛び込んだ感じだった。私の人生はここで狂った。

研究生の卒業公演は同じ第1期生の市沢道子を書いた『赤い鉄の生命（いのち）』だった。川崎演劇協会第12回発表会として上演された。1960年6月18日、



劇団創立の頃のメンバー（1959年）（50周年記念誌より）



その公演は終わった。公演が終わるや否や劇団員たちが「国会へ行こう」と言い出した。当時は、普通の商店や小さな工場さえも「本日は安保デモに参加の為休業します」という貼り紙がされているほどだった。ほとんどの劇団員がなんの違和感もなく国会へ出かけた。20数名だった。私も公演の興奮もそこそこに、ついて行った。国会前には33万人もの人々が「安保条約ハンターイ！」と声を張り上げていた。しかし、悔しいことに未明の12時をもって日米新安保条約が自然承認されてしまった。

私は政治に目覚めた。時に19歳だった。

## 創立公演は日朝友好の叙事詩

第1期生の卒業公演からわずか10日後の6月28日から5日間、創立公演『炉あかり』が川崎市労働会館で行われた。しかし、この公演中、ハプニングが起きた。公演18日前の6月10日、安保条約の改定を進めるために米国の大統領秘書のハガチーが来日、羽田空港で学生や労働者たちがその乗用車を包囲したために、ハガチーは降りられずヘリコプターで脱出するという「ハガチー事件」が起きた。その時、日本鋼管労組の一員として参加していた劇団員水野哲夫が不当にも逮捕されたのだった。公演を中止するかどうか話し合ったが、急遽代役に劇団十五人会の野村達也さんに依頼して出演してもらうことにした。ところが、水野の釈放要求が実って彼は公演期間中に釈放され、公演会場に駆けつけることができたのだ。野村さんと出番を分け合って、無事公演を終えたのだった。

後日談になるが、拘留されている水野に何回も差し入れに行ったという室野定子に彼はどれだけ励まされたことだろう。のちにこの2人は結婚することになる。

ところで、この『炉あかり』は鶴見小野や桜本を取材して黒沢参吉が書いた創作劇だった。「民族の愛憎を越えて贈る 日朝友好の叙事詩」とポスターに書いたように在日朝鮮人との友好を描いたものだ。1,200人以上の観客に恵まれ、幸先のよいスタートを切ったのだった。

蛇足になるが、その舞台で私は飲み屋で黙って飲み静かに帰っていくという朝鮮人労働者の役だった。セリフもなく、背中を丸めて帰る後ろ姿が「すごくリアルだった」と褒められたが、私が褒められたのは63年の劇団生活の中で、この時と、ずっと後の2019年の『日本民家園ものがたり』で藤井康雄君の入院で急遽代役を務めた教育長の演技だけである。あー、情けなや。

創立公演『炉あかり』のパンフレットには、当時の劇団の心意気が書き込んである。「川崎協同劇団は日本——京浜工業地帯を、その拠点として生きる劇団です。川崎協同劇団はこの時この地で働くすべての仲間の中に生きる劇団です」

こうして劇団は、創立時のスローガン「この日、この地で、この人々と」を63年経った今も掲げ続けている。

\* \* \* \*

会報編集部から 今号から城谷護さんによる「私説・京浜協同劇団の歩み」を連載します。文中、劇団員の敬称は省略します。



創立公演「炉あかり」のカーテンコール（1960年）（50周年記念誌より）

劇団員による劇団員紹介 第 15 回——田中耕一さんによる柳沢芳信さん紹介

# 劇団の中でバランスをとっている

京浜協同劇団 田中 耕一



京浜協同劇団は、個性派が多いことは皆さんご存じのことと思いますが、その中でバランスをとっているのが、柳沢さんです。その仕事は多く、私が知っているだけでも、劇団では俳優、音響、舞台監督、制作、演出助手、川崎演劇協会と様々な仕事をされ、劇団以外にも柳沢精機の社長、川崎中小業者総合センター代表理事、ゆめホールシネマ倶楽部など多くの顔を持つ方です。

京浜協同劇団との繋がりは、1979 年に入団されてからですから、44 年となり、長きに渡り劇団を中心に支えてこられた人物です。

私は 2016 年に入団してからの付き合いですので、音響や舞台監督、演出助手、制作など公演を支えて頂いている印象が多くあります。そんな中で一度だけダブルキャストをさせて頂いたのが 2017 年秋公演の「病氣」(別役実作/藤井康雄 演出)。

劇団として初の別役実作品、不条理劇(相手との会話が成立しないセリフが多い)、アリーナ席(舞台を客席が囲み、お客様との距離も近い)とチャレンジングな作品でした。私にとっても入団 2 年目で突き当たった大きな壁の様な作品でした。

その作品で台本に書いてある字面だけをとらず、セリフのイントネーションやタイミングを工夫することを柳沢さんに教えて頂いた記憶があります。同じセリフでの言い回しなどにより観る方には大きく違ってきて、不条理劇の醍醐味である会話の不成立による笑



いを誘うことを柳沢さんの演技から学びました。

また、多くの公演作品で得意な工作技術を駆使されているのもお手伝いをしながら横で拝見していました。特に印象深いのが、2021 年第 39 回かわさき演

劇まつり『冒険者たち ガンバと 15 ひきの仲間』(原作:斎藤惇夫/脚本・演出:大谷賢治郎)での移動する台です。出演者の顔をお客様に見えやすいように傾斜がついた台に転換(移動)を可能とするためにキャストを取り付けました。台には最大 10 名程が乗り、その荷重に耐え、観客には床と台との間を見せないような微妙な高さ調整や台に乗る出演者が滑らない様に台上に滑り止めマットをひくなど、多くの工夫を凝らした台を設計されたのです。台の骨格は鉄骨、周りは木製版での製作には多くのスタッフ、出演者の方々も加わり、作りあげましたが、いざ転換を行ってみると人が乗ってないので、軽過ぎたり、重過ぎたりと微調整を柳沢さんに続けて頂きました。この調整は、稽古場だけではなく、公演会場(多摩市民館)でも行われます。このような技術力と多くの経験値が必要なことをやり遂げられることが、柳沢さんが信頼されている理由の一つだと思っています。

さらにこのお話、公演後のバラシでは骨格である鉄骨の解体に時間を要し、夜 11 時過ぎまで多摩市民館の外で数名での解体作業が続く、それもやり切ったことが印象深いです。

さらに音響としては、劇団内だけでなく、様々なイベントで音響技術をご提供されています。私もたまにお手伝いをご一緒致しますが、イベントでは様々な方々が歌、演奏、演説をされ、そのマイクやスピーカーの設置、音量調整などを行います。

そこにも柳沢さんの人柄が現れます。特にマイク。マイクスタンドにマイクをセットしますが、マイクスタンドの高さを出演される方ごとに合わせたり、その方の顔が見えるように工夫したりとされています。この辺りの気配りも柳沢さんの特徴であると思っています。

以上、柳沢さんの活動のごくごく一部のご紹介を通して、私から見た柳沢さんをご紹介致しました。

因みに柳沢さんの気配り音響を体験されたい方は、京浜協同劇団の 2023 年秋公演「獅子」11 月 18 日(土)~へお越し下さい。音響をご担当頂く予定です。

お楽しみに。

魅力ある感動的な作品

# 三好十郎の『獅子』に挑みます

京浜協同劇団 制作部長 城谷 護

今秋11月に、三好十郎の『獅子』を上演することになりました。演出は護柔一、制作は田中耕一です。会場はスペース京浜で、5日間、10ステージです。

この作品、実は私が以前から「やりたい」と思ってきた芝居です。劇団に提案し、みんなの承諾を得られたので上演の運びとなり、とてもうれしく思っています。

なぜやりたいのか、その第一は、ドラマの構成がダイナミックで、最後の場面が実に感動的なのです。結婚する相手は親が決めるというのが普通だった時代に、自分があきらめきれない人に土壇場で沿い遂げようとする娘の決断に心打たれるのです。第二に、登場人物の一人ひとりが実に個性的でよく描かれていて、役者ならどの役に振られてもやりがいのあることです。第三は、戦争への反対の意思が明確に示されていることです。

【ものがたり】今日は娘、お雪の「嫁見」の日、めでたい日。相手はにわか成金のせがれ。まもなく使いの者が訪ねてくる。話を進めてきた母親のお紋はその接待準備にせわしない。しかし、嫁になるはずのお雪はなぜか浮かない。娘、お雪の幸せを願う父親の義春もなぜか煮え切らない。さあ、そこへ嫁を下見する使いの者たちがやってきた……。

はらはら、どきどき、この結末はどうなるのか。

【作者】三好十郎は1902年、佐賀県生まれ。昭和初期から終戦後の復興期に活動した劇作家で、詩人、小説家でもある。早稲田大学英文科卒業。壺井繁治らとともに左翼芸術同盟を結成し、ナップの下部組織プロット（日本プロレタリア劇場同盟）に属して、プロレタリア劇の作家として活動。その後、左翼的な活動に疑問を覚えたとしてプロットを離脱。1940年に代表作の一つ『浮標』を<sup>ぶい</sup>発表、転向期の作品として評価された。戦後は、近代文学への批判を貫き、無頼派の人といわれる。1951年、ゴッホを描いた『炎の人』が高く評価され読売文学賞戯曲賞を受賞。『彦六大いに笑ふ』、『斬られの仙太』など映画化された作品も多い。1958年、肺結核で死去。56歳。

【黒沢参吉とのつながり】わが劇団の初代代表、黒沢参吉は若い時、三好十郎の家に転がり込んで教を乞うたことがあるそうです。三好十郎や新築地劇団が役者を探しているということを知った黒沢が家を飛び出して三好家に転がり込んだというのです。黒沢はその時18歳、三好は33歳。黒沢は三好家に寝泊まりしながら新築地劇団の稽古を見学に通ったのだそうですが、三好や劇団にも黒沢を欲しがる気配もなく、父親に帰って来いと言われてやむなく、わずか1週間帰ってきたそうです。私はそのことを黒さんから何回か聞いたことがあり、記憶に残っています。

🎭 京浜協同劇団 第97回公演

## 獅子

作 三好十郎 演出 護柔一

料金 予約制 一般3,000円 学生1,500円

会場 スペース京浜（京浜協同劇団稽古場）

問合せ・申込み 京浜協同劇団

〒212-0052 川崎市幸区古市場2-109

TEL 044-511-4951 FAX 044-533-6694

HP: <http://keihinkyoudougekidan.com/>

## ひしひしと胸に迫る父と娘の愛 三好十郎の名作

公演日程	11/18 (土)	11/19 (日)	11/23 (木祝)	11/25 (土)	11/26 (日)
11時開演		○	○	○	○
15時開演	○	○	○	○	○
19時開演	○				

※夜の部の公演は18日だけです。

◎文化の仲間通信◎

◆青年劇場 第131回公演 星をかすめる風

日程 2023年9月8日(金)~17日(日)(詳細問合せ)
会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA
原作 イ・ジョンミョン「星をかすめる風」嶋良子訳(論創社刊) / 脚本・演出 シライケイタ / 出演 葛西和雄・広戸聡・板倉哲・大木章・島本真治 ほか
料金 一般5,200円 夜割(前売りのみ)4,500円 U30(30歳以下)3,100円 中高生(劇団のみ受付・前売のみ)1,000円ほか(詳細問合せ)。

終戦間際の福岡刑務所。看守の杉山が何者かに殺され、若い看守、渡辺は杉山を殺した犯人捜しを命じられる。

問合せ・申込み 青年劇場 03-3352-6922

Eメール: info@seinengekijo.co.jp

◆劇団埼玉 第104回公演 ロスタイム

日程 9月16日(土)、17日(日) 開場13時半 / 開演14時
会場 上尾市コミュニティセンターホール (高崎線上尾駅西口徒歩15分)

脚本 鏡味富美子 / 演出 堀越飛鳥 / 出演 中山浩充・朝比奈悦子・新庄瑞穂・伊藤節子ほか

料金 一般3,000円 65歳以上2,500円

小中高生1,000円 未就学児無料

人生の最後に与えられた僅か30時間。やり残したことは何だったのか。そしてこの短い時間に見届けた家族のそれぞれとは……。

問合せ・申込み 劇団埼玉

TEL050-3479-0481 (留守電対応)

FAX048-777-4430

HP: https://gekidan-saigei.jimdofree.com

◆劇団民藝公演 ローズのジレンマ

日程 9月22日(金)~10月1日(日)(詳細問合せ)
会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作 ニール・サイモン / 訳 長木彩 / 演出 田中麻衣子 / 出演 檜山文枝・桜井明美・神敏正・篠田三郎

料金 一般6,600円 夜チケット4,400円 U30(30歳以下)3,300円(劇団のみ取り扱い・要証明書) 高校生以下1,100円(枚数限定・劇団のみ取り扱い・要証明書)(全席指定・税込み)

喜劇王ニール・サイモンのあつと驚く展開と笑いは、だれにでもある人生の痛みと哀しみに癒しを与えてくれます。

問合せ・申込み 劇団民藝 TEL 044-987-7711

(月~土 10時~18時)

◆劇団文化座公演 165 好日

日程 9月23日(土)~10月1日(日)(詳細問合せ)
会場 シアターX (カイ) 両国

作 三好十郎 / 演出 西川信廣 / 出演 白幡大介・高村尚枝・鳴海宏明・佐藤哲也・米山実・沖永正志・原田琴音・相川春樹(文学座)・小林勝也(文学座)

料金 前売り5,500円 当日精算券6,000円 30歳以下5,000円 高校生以下3,000円ほか(詳細問合せ) 三好十郎生前未発表戯曲、本邦初公演! 主人公は

そのものずばり「劇作家・三好十郎」

問合せ・申込み 劇団文化座 03-3828-2216

(日曜・祝日を除く10時~18時)

E-mail: info@bunnkaza.com

◆演劇集団土くれ 第70回公演「月虹の宿」

日程 10月5日(木)~7日(土)(詳細問合せ)

会場 麻布区民センターホール

原作 岩瀬顕子(日穂-bion-) / 演出 石塚幹雄 / 出演 奥山規子・小沼武司・斉城薫ほか

とある寂れた温泉街に、姉弟で切り盛りしている旅館があった。そんな中、海外に住んでいた次女真希が、急に帰国してくることとなった。ひとり娘を連れて帰ってきた真希だが……

問合せ・申込み 演劇集団土くれ

HP: http://tsuchikure.net

◆人形劇団ひとみ座 人形劇「ごきげんなすてご」

日程 10月15日(日) 14:00 開演

会場 芸能花伝舎(新宿区西新宿6-12-30 旧淀橋第三小学校)

料金 前売 おとな1,000円 子ども500円

当日 おとな1,400円 子ども700円

※全席自由

問合せ・申込み ひとみ座

TEL: 044-777-2225 (10時~18時 平日)

FAX: 044-766-0249

E-mail: puppet@hitomiza.jp

HP: https://hitomiza.com/

◆山寺圭子おしゃべりコンサート in 川崎

日程 10月23日(月) 14:00 開演

会場 ミューザ川崎市民交流室

ソプラノ 山寺圭子 / ピアノ 佐藤恵

料金 3,000円(全席自由)

問合せ ミニコンサートの会 高橋

TEL: 070-5016-8571

●世話人会から

8月15日の大田区の花火大会に合わせて、久々に交流会を計画していましたが、台風接近のため、やむなく中止しました。花火大会も中止になりました。

\* \* \* \*

◆会員の動向◆

文化の仲間会員の丹野卓(たんの・たかし)さん(石巻市在住)が、去る8月17日に亡くなられました。82歳でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行◎



絵手紙 竹間テル子

「厳選」大谷敏行の川柳塾
マイナンバー徴兵制が見え隠れ
二〇二三年六月二〇日『朝日新聞』掲載
線状が戦場と化す降水帯
七月三〇日『しんぶん赤旗日曜版』掲載
お盆とは生者と死者が交わる日
敗戦を終戦と言う国なるも
蘇る銃後になった八月が
原爆禍 オツペンハイマー等閑視
「原爆」を怖いもの見たさの「米社会」
タイガース 疾風怒濤 一人旅